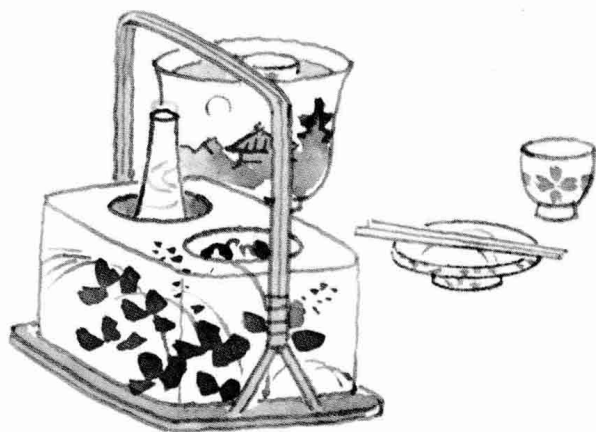
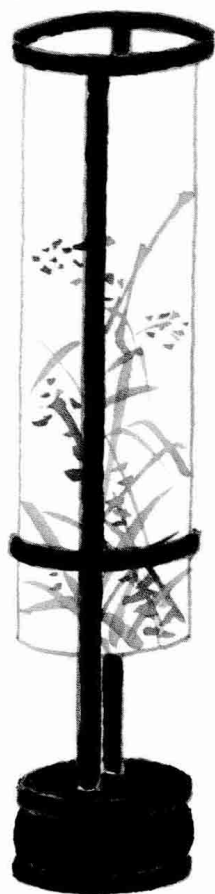


川霧の女

伊藤桂

伊藤桂一 川霧の女

講談社



© 1980

KEIICHI ITOH

第1刷 昭和55年3月18日



¥ 1000

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は
お取替え致します

川霧の女

著者 伊藤桂一

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

振替東京 8-3930

電話 東京(945)1111

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

0093-306670-2253 (0) (文2)

目次

竹を切る

七

鵜（つぐみ）

七

幟を立てた船

九

逃げた鳥

三

旅先よりの使者

九

鵲（もず）

二七

川霧の女

二七

野の薊

二七

身代り

二七

絵のなかの女

二七

川霧の女

竹を切る

足守川は、備中国の山間部を發して、平野をゆるやかに流れて海に入る。

野川の趣をもつ川である。

足守藩は、この足守川が山間部から平地へ流れ出してくる、その川畔にある。山裾の一廓に、陣屋を中心として武家屋敷があつまっていた。川沿いの街道筋には、民家の屋並が細長くつづいて宿場となる。

足守藩木下家は、わずか一万石余りの小名である。

秋も深まった、ある日の夕景だったが、桑坂伴内が、足守川のほとりで、川畔に密生している女竹を切っていると、

「これ、伴内。なにをしておる」

と、堤の上で、呼びかけてくる声がした。顔を上げてみると、家老の庄川喜兵衛である。夕まづめを釣っているらしく、身軽なたっつけ袴のいでたちで、片手に釣竿、片手に魚籠をもって、伴内をみていた。家老はもう五十に近い。伴内は、作事方に籍を置いている父の手伝いを時々するくらいで、まだ無役の、二十二歳の部屋住みの若者である。

伴内は、声をかけてくれた喜兵衛に、畏まって一礼してから、

「竹を、切っております」

と、いった。

「竹をな？ なににする？」

と、重ねてきかれるので、つい、

「はい、私も、釣竿を、つくろうかと存じまして」

というと、喜兵衛は、堤を、下りてきた。上流から釣り下ってきて、竹藪たけやぶをよけて、堤の上をまわってきたのである。川畔には、女竹の藪が多い。女竹は、細く、丈もあまり高くはならない。竹細工向きの竹だが、伴内は、その女竹を二、三十本も切って、足もとの草むらの上に置いていたのだ。喜兵衛は当然、これを見る。

「継竿つぎざなをつくるにしても、多いな。知っておるぞ。竿ではなく、うちわをつくるのだろう」

喜兵衛は、そういつて、笑いかけた。

「は。いえ。その——」

と、伴内が、とりみだして、いい淀よどむと、喜兵衛は、話題をかえるかに、竹の魚籠いさなごをみせて、「わけてやろうか。ウグイが多いが、脂あぶらが乗のってきて、味がよくなっている。酒の肴さかなには格別だぞ」といつて、魚籠を傾け、その場に、釣った魚を二、三十尾落した。酒の肴さかな、というののは、伴内の父、兵吾に——といっているのである。

「ありがたくいただきます。なによりです」

と、伴内は、何度も頭を下げて、礼をいつた。

喜兵衛は、流れへ向けて、歩みをすすめたが、ふと、足をとめて、ふり返ると、いつた。

「いまの、うちわのことだが、ききたいことがある。今夜、わしの家へ来るがよい。ついでに、うちわを二、三本くれぬか？ もっとも、もう、うちわの要い季節でもなくなったが、お前のは、年間のものだろう」

「は。はい。その——」

と、伴内は、重ねてとりみだして、また同じようにいい淀んでから、

「伺わせて、いただきます」と、いった。

そうして、こちらに背を向けて、もう、釣りはじめている、喜兵衛のうしろ姿をみながら、伴内は、

（叱られる、とも、思えぬが）

と、内心に首をかしげていた。

むろん、ほめられるはずもない。

心配と、期待が、こもごもにあったが、そのまま、切った竹の束を抱えると、魚も忘れず草の茎に刺して持ち、挨拶するには喜兵衛は遠のきすぎたので、黙って会釈だけして、別れて、堤へあがった。

その晩、伴内は、庄川邸へ赴き、家老ご手製のウグイの甘露煮などで、一杯よばれながら（いつでも伴内は酒は飲めなかったが）あれこれと、世事にわたって話し合った。

喜兵衛が、ききたがったのは、まず、伴内の、うちわつくりのことである。伴内は、座敷へ招じられて、喜兵衛にさしむかうなり、

「ご家老、これを持参させていただきました」

といって、うちわを三本差し出したが、それを手にとってつくづく眺め入りながら、喜兵衛は、「大したものだ。これほどとは思わなかった。伴内、大したものだな」

といい、伴内が、何となく首をすくめると、

「いや、大したものだ」

「うちわのことは、そのうち、きこう、と思いながら、ついたりまぎれてな。今日は、いいところで会ったから、呼んだのだ」

と、叱るのではない明るい顔つきのまま、

「うちわだが、生計の、助けか？」

と、きいている。

伴内は「は」と答えて、ちよつと喜兵衛の顔色をうかがってから、素直に、

「いえ。井端さんの、ご遺族のためにです、ご家老」

といつて、あとは眼を伏せた。

伴内は、家老のことだし、だいたいのかことは承知していて、問いかけたのかもしれない、と察し、万事、あるがままを告げたい、と、とつさに心をきめたのだ。従つて、眼は伏せたが、そうしながら、しっかりと、自分を、たしかめている。

「井端か。そうか。——江戸に、いるようだな」

喜兵衛は、自分で、酒をつぐ。

伴内には、酒の酌をしてやる、気持のゆとりがなかった。もし、喜兵衛に咎められたら——という、淡い不安も、ないではない。それで、身をかくして答える。

「はい。江戸の、新鳥越におられます。海禅寺という寺の近くだときいております」

「家計も、苦しいというわけか」

「家財を、売り払った金で、細々と暮しておられます。お内儀は、仕立物をなさり、娘の菊乃どのは、近所の商家の手伝いをやっているようですが、器量のいい人ですし、それで、本願寺門前の茶屋で働かないか、と、世話にもなつて義理のある人からいわれて困っている、と、手紙にありました。心配です」

「うむ。心配だな」

と、喜兵衛は、同調してみせてくれたが、ここらはなかなか苦勞人というところだろう。伴内は小さく「は、恐れ入ります」といったが、そこで顔を上げた時、ひどく嬉しそうに頬をかがやかせていた。氣立てのよさがそのまま出ていた。

「井端の遺族のためのうちわづくりは、お前らしい思いつきだな。喜んでいるだろう」

喜兵衛が、ふと、しんみり、そういうと、

「私などの力では、せいぜいこれくらいのことしか、できません——」

と、伴内もしんみりする。しかし、つづけた。

「私には、井端さんのご遺族の暮しぶりがわかりますし、みかねまして、私なりにお手伝いをしよう、と思いましたが。うちわは、ある程度まとまりますと、こちらから、岡山の卸元へ届けます。ただ、なにぶん、手のかかります仕事で、^{はかど}拂りませぬし」

ここでちょっと、井端——作右衛門のことについて、触れておかなければならない。

作右衛門は、勘定方の出仕で、勘定役の補佐を勤めていたが、長年、その職に身を置いていたから、仕事のことは、実によくわきまえていた。その、よくわきまえていたためもあるだろうが、それがかえって仇^{あだ}になって、藩金を流用していたところが露見して、藩からは別に、きびしい追及を受けただけではなかったのだが、身を恥じたためか、自決した。ひとつには、平素も病身だったが、近來とみに弱っていたので、心魂の衰えも手伝って、死へ奔^{はし}ったということにもなるかしれない。

いずれにしろ、作右衛門のことは、罪は罪だったし、まわりへのしめしもあるから、^{ちか}禄は召し上げられた。作右衛門は、死んだ時四十六歳、妻の一世が四十三歳で、娘の菊乃が十九歳である。男の子がないから、養子を迎えて、という矢先のできごとだったのだ。事のあと、一家は、国にはいられず

に、江戸へ移って行った。

「——手間のかかる仕事、ということとはよくわかるな。一本つくるのにも、いく日もかかるのか？」と、喜兵衛は、手にしたうちわに眺め入りながらきいている。感心している眼もとになっていた。

うちわ——とはいっても、たんねんに眺め入りたいほど、精巧な品だからである。いわば日常の具——というよりも、部屋の飾りにふさわしい美術品なのである。

「絵が、透かしで、はいっているのだしな」

と重ねていって、喜兵衛は、傍らの行燈に、うちわを透かしてみたりする。喜兵衛が手にしていたのは、朝顔と井戸を描いたもので、紅と紫の朝顔の花の切り絵が、これは花がそのままうちわの表面に出ているが、葉は、貼り合せた和紙と和紙の間に、はさみ込まれている。つまり、明るいところへかざすとみえる、透かしになっているのだ。

「上に、雲が描いてありますが」

と、そのとき、伴内がいうので、喜兵衛がうちわの上部を透かしてみると、これも、雲形の模様が、表と裏ともに切り絵で貼り込んである。

「その雲の下辺の縁が文字になっておりまして」

と、さらに伴内がいい添える。喜兵衛も、さらに念入りにみてから、

「なるほど、朝顔に、つるべ、ふむ、そうか、とられて、もらい、水——ということか。句入りうちわだな、これは」

ふむ、ふむ、と、いちだんと感心してみせた。そうして、ひとりごとのように「凝って、風流なものだのう。渋うちわのように、ガサガサと貼って、渋を塗り込めばよい、というものではないな。たしかにこれは、たいそうに、手のかかるものだ」

と、いつて、うちわから、なお、眼を離さない。

「かなり馴なれませぬと、三日に一本もできませぬ。私は早朝に起きてやります。夜は、手暗がりになりますので、こまかい仕事はできません」

「そうだろう、渋うちわなら、夜も昼も、あるまいが」

「渋うちわは、渋うちわで、あれはまた、たいへん、役に立つものでございます。丸亀では、ずいぶんつくられておりますが」

「丸亀か。そうか」

「ご存じかと思いますが、あの土地は、水の乏しいところでございまして、ことに夏のころは水に悩みます。従つて、農事もたいへんで、あちこちに溜池がございますが、それでも、水不足で争いが絶えません。渋うちわは、そういう、水不足の時にも、役に立つときいております」

「ほう。渋うちわが？」

喜兵衛は、伴内のいった意味がわからず、首をかしげた。

「はい。いま、ご説明を——その、渋うちわを」

と、そこで、伴内は少し顔の表情をくずしながら、手真似てまねをまぜて話したが、それによると、丸亀辺では、日なか、渋うちわを手にして、それでおおきながら、のんびりと（そう装まゝつて）水の見廻りをする。そうして、溜池から流れ出している水が、灌水溝のわかれ目のところで、自分の田へではなく、人の田へ流れ込んでいると（むろん順番でそうしているのだが）ひよいと、しゃがみ込んで、渋うちわを人の田の流れ口に、水を防ぐように立てる。つまり、渋うちわで、水を堰せききとめてしまうのだ。すると、水は方向を変えて、自分の田へ流れ込む。水を、ひとしきり自分の田へ流し込み、そのうち、あたりに人の気配でもすると、立ちあがって、また渋うちわであおきながら、何気ないふりで、次の田へまわってゆく、というのである。こうなると渋うちわは、むしろ農具のようなものであ

る。

「なるほど、面白い話だ。それに、身につまされるな」

と、それをきいて喜兵衛が実感をこめてそういったのは、その話に、どこか、小藩の苦しみに通じるものをうけとったからだろう。一万石余りの禄高では、家老のもらい分だって高はしれているのである。まして伴内の家などは、四石二人扶持だから、大藩では、足輕のもらう禄高であろう。それでいて、内職に、竹を切りうちわをつくりして、知己の遺族に貢いでやる、というのは、いかにもいいじらしい。喜兵衛が、身につまされる、といったのは、この、伴内のことをも、下敷きになっている言葉だったのかもしれない。

「ところで、このうちわだが、よく、こんな風雅なものを案じ出したものだ。物の本にでも、記録があったのか？」

これは、喜兵衛が、いちばんききたいところだったらしく、膝をのり出すような気配になる。

「実は、庭瀬藩の方から、習いうけました」

と、伴内は答えている。

庭瀬藩——というのは、領地は、倉敷と岡山の間の街道沿いにある。ここの板倉家も禄高二万石の小藩だが、器用な人が多く、藩士のたれもが、うちわつくりのよい腕をもっている。板倉家は、上総高滝から移封になって来たのだが、あるいは旧領地に、うちわつくりの技術があったのかもしれない。

「所用で、岡山へ出向きました折、庭瀬藩近くの街道の茶店で小憩しましたが、そこに飾ってありましたのを見て、これは、と思いつき、その足で、庭瀬藩を訪れて、ある方に概略の話をきかせてもらいましたのです。むろん、話をきいただけでは、どうにもなりません。出来合いのうちわを四、五本ゆづってもらいまして、帰藩のち、自分なりに研究をし、その後、何度か、庭瀬藩に足を運びま